

潮時計

壺井 栄



実業之日本社

潮 時 計

定 価 270 円

昭和 33 年 12 月 10 日 発行 ©

著 者	壺 井 栄
発 行 者	増 田 義 彦
印 刷 所	星野精版印刷株式会社

東京都中央区銀座西 1 の 3

発 行 所 株式
会社 実 業 之 日 本 社

電 話 京 橋 (56) 5121—5

振 替 口 座 東 京 3 2 6

Printed in Japan

目

次

幸福の予測.....	137
水　　仙.....	116
胸さわぎ.....	98
空のどこかに.....	79
足　　ぶ　　み.....	63
秋　　近　　し.....	45
ひとり歩き.....	23
白　　い　　雲.....	7

灯のさそい……………154

心寄せ……………171

宵の星……………188

世間知らず……………206

さざなみ……………225

波の上……………244

花の影……………260

潮時計……………276

装
幀
南
大
路
一

潮

時

計

白　い　雲

一

谷村杏子は家を出がけに妹の桃枝から、

「お姉ちゃん、今日、もしかしたら電話かけるね」

といわれ、またいだ玄関の敷居をあともどりし、

「どうしてよ」

そんな用事があるのなら、今聞いておこうというような声でいうと、目の悪い桃枝は少し空向きの視線を、それでも杏子の方へそそいでいる様子で、

「かけたいんだもん」

少し甘えたようにいう。桃枝はもう、昔流にいえば十九の厄年なのだが、生れつきの不具の

せいか發育がわるく、十七ぐらいにしか見えない。

「よしなさい。十円損じゃないの」

ちようどそこへ、杏子の弟の茂樹が出てきて、靴をはきながら、

「なんだって？」

どちらにともなく聞いた。杏子がだまっているの、それなら私がいうといった調子で、桃枝は今度は兄の方へ顔を向けながら、

「ね、じゃあ、お兄ちゃんに、電話かけてもいい」

「電話？」

「そう。私、電話かけられるようになったのよ」

「よせよせ、そんなこと」

「あら、どうしてよ」

「そんな無駄なこと、するもんじゃない」

靴の紐を結びおえて立ち上った茂樹は、くるっと桃枝の方をふりむき、むくれた顔に出あうと、

「なんだ、その顔」

「……」

「ほんとだよ。用もないのに女の電話なんかかかってきたら、いたくもない腹をさぐられるばかりじゃないか」

すると桃枝は少しぎげんを直して、

「あら、あんなこといつてる。お兄ちゃんのいたいはら知ってるんだから、桃枝」

「なんだって」

「私がめくらだと思って、馬鹿にしなさんな。心眼はね、はっきりしてるんですから」

茂樹は苦笑しながら、

「恐れ入りました。しかし、電話はだめだよ」

「わかったわ。まちがえられると、わるいからかけない。その代り百円」

ペロとしょに手を出されて、茂樹はポケットをさぐり、

「電話料なら、十円だぞ」

十円玉をほんとに桃枝のてのひらにおいたので、三人とも思わず笑い出してしまった。桃枝

はまぶしそうに、ながいまつ毛をふるわせながら、しっかりと十円玉をにぎったまま、

「じゃあ、電話かけてもいいってわけ？」

「なんだって」

「電話料まで、もらったんですもん。かけないと悪い」

そんなじょうだんをいう妹を、杏子はいとしそうにながめ、自分もまたがま口から十円玉を二つとり出して、にぎりしめている桃枝の手に押しこんでやりながら、

「桃枝ちゃん、かけていいわよ。まってる。ね、お昼すぎよ。そうね。十二時三十五分から、四十五分の間、私事務室にいるようにする」

すると桃枝は、まるで小学生のようににはね上ってよろこび、

「わかったわ」

「番号知ってる？」

「しってる。三三二一から三三三〇まででしょ」

「〇三三二一から、〇三三三〇までよ。はじめは必ず〇がつくのよ」

「あ、そうか」

「ひとりで、大丈夫？」

「うん」

そして桃枝は、にやっと笑ってうつむいた。少しきまりのわるいときにする、彼女の表情なのだ。

茂樹と一しょに外に出た杏子は、そんな桃枝の顔を思い出しながら、

「ねえちゃん、桃枝このごろ、少しへんじゃない？」

「うん」

「電話かけるの、だれにおそわったの？」

「しらないよ、そんなこと」

「まあ、いいけど。電話ぐらいかけられるようになってくれないと、ほんとに困るものね」

「そりゃそうだ」

「親やきょうだい、いつまでも一しょにいられるものでもないんだし」

「……」

「私は桃枝と一しょにくらすつもりだけ——」

ちらっと茂樹の方をみたのも、最近の茂樹が、結婚したがっていることや、そうなればどこかアパートにでも別居したいらしい様子なのを、感じていたからだだった。

「ね、桃枝の前ではあんまりいえないけどさ、あんた、どうするつもり？」

「うん」

にえきらない茂樹に、杏子は少しいらいらしながら、

「はっきりなさいよ。若いくせに」

少しとげのある杏子の言葉に、むっとしたらしく茂樹は、

「やいやいいうなよ。それがはっきりできるぐらいなら、雑作ないさ——」

杏子にしる茂樹にしろ、これまで度々の縁談も持ちこまれ、また自分の方から積極的な気持ちを持たされた相手もあったのだが、いよいよとなると、いつでもだめになっていた。その原因が、どうやら桃枝にあると気がついたのは五年前だった。

——とにかくね、血統というものは、やはり大へんなことですもの。ことに、生れつきの目の病気なんてものも、あれは遺伝だそうですね……

杏子の縁談をそういってことわった仲人の言葉は、癒えない傷あとを杏子の胸に残して、そ

れからの杏子は、どんな話にももうのらない決心をかためた。しかし、それが押し通せるかどうかの自信は、杏子の胸から次第に消えかかっている。ゆらいでいるといった方が正直かもしれない。

——あんなにやさしい子なのに、兄や姉の縁談の邪魔になるなんて……と、何にもまだ知らないらしい桃枝のために、どのくらい杏子は悲しんだかしかない。だから、将来のことについての相談ごと、桃枝の前ではついオブラートにくるんだようなことしかいえない。しかしこれが、いつまでつづけられるものなのか。

——この現在のまま、だれもが年をとらないものなら……

馬鹿げたことを、まるでしんけんに考えたりすることさえある杏子だった。彼女はもう二十八歳、茂樹は二十五歳だった。二人ともS時計に勤めて、杏子の方はもう丸八年になる。知らぬ人になら、二十二三に見せる若さもあるが、会社ではだれも彼女を若いとは思っていないらしい。だが、茂樹のこのごろを見ると、杏子の内部は疼くような刺激をうける。彼女はつい茂樹と二人になると剣のあるようなことをいってしまう。

「桃枝は私がひきうけるからさ、あんたは勝手にあんたの道をゆけばいいわ。ゆくくなっていっ

たって、けっきょくいっちゃうんだから、そのくらいなら、合意の上でいった方がいいでしよ」

「いやだなあ。いつだって姉さんは、そんな風にのしかかったいい方をするんだから」

「そうかしら、私はもののわかったことをいってるつもりよ。——どうせ男なんて」

ふっと言葉をきると、茂樹は瞬間立ちどまるようにして、

「男なんて、どうしたんだよ」

「得だっていうのよ。羨やましいわ」

「どうして」

「だって、好きなように、できるじゃないの。結婚にしろ、別居にしろ、意志一つで決るわ」

「ぼくのすること、そんなに薄情かなあ」

「薄情なんていわないわ。でも、結果的にはそうなるかもしれない。奥さんもらってからまで、不具のきょうだいのことなんか、思っていられないのが本当よ。だから——」

「よしてくれ。ぼくは桃枝と一しよに暮すから、姉さんはどこへなと、とっといってくれ。嫁になと、なんなと——」